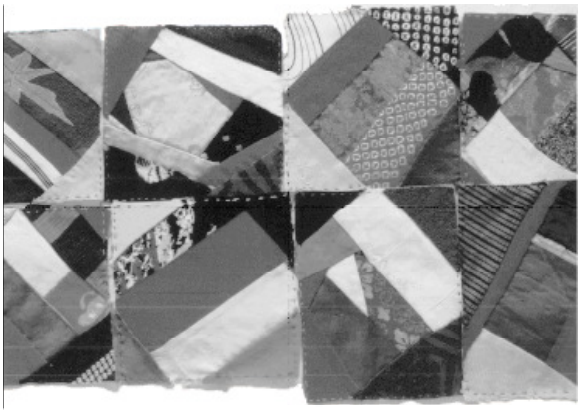
かさおか

発行所
天理教笠岡大教会
かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
(0865)
電話 66−1311
FAX 66−1314



初代様手縫のパッチワーク
（摩耶分教会所蔵）

をやの思いを にをいがけ、
内治(うちうち)に心を配り おたすけに誠の心を尽くそう

1．一歩前進 百万軒
2．おつとめの徹底と ひのきしん
3．機を逃さず おさづけの取次

立教百六十七年 年頭会議

二年目こそ素直に

大教会長様ご挨拶

旧年中は、大変ご苦労さまでした。

昨年は、教祖百二十年祭に向かう三年千日の一年目の年でしたが、それに相応しい成人の歩みができたかどうかは、それぞれの心の中でしっかりと反省していただければと思います。

成人の度合いによって、それぞれの歩幅はみな違うと思いますが、百二十年祭に向かって、たとえ僅かでも、間違いなく、成人の歩みを進めることができた一年だったと思います。

二年目のつとめ方

本年は二年目の年ですが、助走をつけての一年目よりも、二年目のほうがむしろ力が要ります。その二年目の力次第で、来年の、より大きな成人につながると思えば、今年一年の歩み方を、共々に、しっかりと心してつとめたいと思います。

大教会では、教祖百二十年祭に向かって、「をやの思いをにをいがけ　内治(うちうち)に心を配り　おたすけに誠の心を尽くそう」というスローガンのもと「一、一歩前進百万軒　一、おつとめの徹底とひのきしん　一、機を逃さずおさづけの取次」という実践項目を申し合わせて、既に一年つとめています。

これは、今年も来年も変わりません。しっかりとこのスローガン・実践項目を心において、去年にも増して実動の上に心して掛かりたいと思います。

その上で、二年目に当たって、今年一年どういう思いで実践項目をつとめたらよいのか、私自身の反省を踏まえた上で、今から申し上げたいと思います。

歩幅が違えば成人の歩みもそれぞれに違いますが、例えば「百万軒」についても、残念ながらそれを超えることができませんでした。

百十周年に向かっての三年千日の一年前から取り掛かっているので、四年間通して「百万軒にをいがけ」をしてきた実績がありますから、どこまでやれば百万軒をクリアーできるかは分かっていたと思いますが、達成できなかったとなると、三年千日を、何でもどうでもと、仕切って歩んだ勢いが果たしてあったのかと思われます。

第一歩が小さければ、第二歩はその衝撃を受ける力がそんなに大きくないので、第二歩を第一歩よりしっかりと踏み出す必要があります。

▼素直な心と行ないで

そのためにはどういう心でつとめたらよいのかと、一言でいえば、「素直」ということになるのではと思います。親神様・教祖にお喜びいただける素直な気持ちで、素直に実動することが大切ではないかと思います。

教祖年祭に向かっての三年千日の成人の歩みは、少なくとも、ひながたを辿らせてもらうところにあり、ひながたを辿らなければ、ただ三年千日歩んだことにしかなりません。

五十年のひながたの中のたった三つを通ってくれたらよいということで、三年千日、仕切って歩んでいるのですから、この三年間はしっかりとひながたを見つめて歩み切るところに大きな成人の姿があるのです。

天保九年に教祖が月日のやしろとなられたところからひながたが始まりますが、そのもとは何かといえば、夫・善兵衛様が、をやの思いを受けて「はい」と素直に受けた一言からです。

また、ひながた自体でも、「貧に落ち切れ」などのをやの思いに素直に通られたということを考えると、正しく親神様・教祖、また、真柱様の思いを心から受けて、素直な気持ちで歩んでいるかどうかを、先ずしっかりと思案したいと思います。

三年千日の一年目、ひながたを素直に辿ったかと考えると、どこかで忙しさに囚われてしまって、

よふぼくとしての本来のつとめが疎かになっていなかったでしょうか。

お道にはいろんな御用があって、お互いに忙しい日々を歩んでいるのは確かですが、忙しい中にも、心の中にひながたがあったかと考えると、まだまだったような気がします。

▼をやの思いに添い切って

これは私自身の反省ですが、実践項目の二つ目に掲げているおつとめの徹底について、心得違いをしていました。

それはどういうことかと申しますと、長い間、おぢばでつとめさせていただいた中に、おつとめ・祭儀式などを、人一倍、勉強して、自負心を持っていましたので、地方(ちかた)について思い違いをしていました。

前真柱様が、一つの指針として、地方のテープやCDを出されましたが、本当に素晴らしい、ありがたいことだと、大教会としてもそれにしっかりと添いたいと思い、前真柱様の歌い方はこうだから、こういうふうに歌いましょうと、地方の勉強もしました。

その中に、一下り目の「一ツ 正月こゑの」のところを、それまでは「しょーぉーがーつーぅー」と「ぅぅ」を二音で上げて歌っていましたが、テープでは「しょーぉーがーつーぅー」と一音で歌っておられる。なるほどということで、大教会おつとめ奉仕者にも申し上げました。

ところが、よろづよ八首の「よろづよのせかい」のところは、「よーろーづーよーのぉ」と二音で歌っておられます。

私は、一下り目の、「ぅぅ」を一音にされたことを考えて、よろづよ八首も、「よーろーづーよーのー」と一音で歌った方が、笛や三曲とも合うし、歌い方も楽だし、また、息継ぎもしやすいと思って、敢えて前真柱様とは異なる歌い方で、大教会おつとめ奉仕者に申し上げました。

あるとき、その件について、改めて考えてみて、前真柱様の歌い方に合わそうと思うなら、僅かなことでも、しっかり合わすことの方が、むしろ大切ではないかと反省しました。

私が考えるようには歌われなかった前真柱様の思いは分かりませんが、いろんな面でやりやすいからそうしたらよいと思ってしまった自分自身の心が間違っていたと、申し訳なく思いました。

をやに添うということで考えるなら、例えば自分の正しいと思うことでも、それが僅かでも違うとなれば、それは、添い切れていない姿で、どこかで慢心がはたらいていたと反省しました。

ほんの僅かなことかも知れませんが、そのほんの僅かなことが日々重なっていけば大きなズレに繋がってくるのは間違いのないことです。

▼初心を振り返って

私も大教会長として、お陰様で十数年つとめています。何も分からない最初の頃は必死でしたが、十年経ってある程度余裕ができ、どこかで素直さを忘れ、一生懸命さを忘れ、余裕ではなく、甘えが出てしまったということも、そこから反省せざるを得ませんでした。

年限を重ねるほど、我流信仰になってしまって、親神様・教祖の思いに対しての素直さが、どこかで薄れてきてはいないか、二年目をつとめるに当たって、それぞれが、素直な気持ちで振り返っていただきたい。

昨年一年は、確かに忙しく、寝る間を惜しんでつとめられた方もおられるでしょうが、どこかで、これだけしたからよかろうというような思いがなかったでしょうか。

五十年というひながたからすれば、たった三年でよいという思いにすら添い切れていない、たかだか三年なのに、その三年さえもひながたを辿ろうとする気持ちがどこかで薄れてはいないでしょうか。

また、教祖の年祭は、もう三・四回目、五・六回目だということで、年祭そのものがありきたりになってはいないでしょうか。

年限に関係なく、垢が溜まっていないかどうか、一人ひとりがしっかりと反省し、その反省を踏まえて、素直な気持ちと行ないでもって、あと二年、

応えられる歩みにしたいと思います。
どうぞみなさん方、あと二年、しっかりとひながたを見つめて歩みましょう。

本年の動き

本年は、大教会役員・教会長夫妻・布教所長を対象に、本部主催で道の先達大会が開催されます。漏れなく、参加しましょう。
大教会では、各教会で年二回、にをいがけ・おたすけ実修会を開催します。四月から六月の間で一回目、九月から十一月の間で二回目を開催したいと思います。それぞれの教会で、また、それ以外のところでしたいというところは申し出ていただきたいと思いますが、全教会で開催し、一人でも多くの方にこれに参加していただいて、実動の上に繋げていただきたいと思います。
もう一点、十一月二十八日に、別席・ひのきしん団参を計画しています。せっかくにをいがけをしているのですから、この別席団参にも、一人でも多くの方をお誘い合わせをして、そして、共々にひのきしんをして、つとめたらありがたいと思います。
共々に、素直な気持ちで、素直な行ないでもって、今年一年、つとめましょう。どうぞよろしくお願い申し上げます。

〈以上要約〉

春季大祭講話

ひながたの真義

大教会長様お話

本日は、春の大祭に当たり、大勢の方にお集まりいただき、こうして結構におつとめをつとめて、それぞれに大祭のおつとめの理を戴かれたわけです。その理をそれぞれ国々処々にお持ち帰りいただいて、よふぼく・信者の丹精の上に、また、にをいがけ・おたすけの上にと、その理を発揮されることになります。
しかし、共々におつとめを拝しておうたに唱和したなら、おつとめの理を戴けますが、せっかく居合わしても、隣同士で違う話をしたり、おつとめと全く関係のないことをしていると、結局、おつとめの理を戴けずに帰ってしまうことになるので、実に勿体ないことです。

春季大祭の意義
――明治二十年のをやの思い

春の大祭は、明治二十年、私たち一人ひとりの成人を急き込んで教祖が御身を隠された、その日を祈念してつとめますが、ただ、祈念してつとめるのではなく、そのときのをやの思いを思案し、その思いに沿うべく成人を心定めするのが、春の大祭の意義です。

▼辿ってこそのひながた

当時、教祖は、生神様でした。困ったことがあれば、たちどころに御守護くださる生神様だ、教祖さえいらっしゃれば陽気ぐらしに立て替わるという思いもあったでしょう。
お側に居られた人々は、ひながたの大切さを分かっていながら、生神様が目の前におられるが故に、ついをやに甘えてしまって、ひながたを辿ろうとしなかった。
辿らなければ、ひながたこそが陽気ぐらしに向かう道として、わざわざ、御自らお示しいただく必要はなかったのです。
また、たすけを現わすだけなら、定命を縮められることなく、少しでも不思議なたすけを現わして、陽気ぐらしの世界に立て替えようとされたはずです。
このままでは、陽気ぐらしが成就するどころか、どんどん遅れてしまう。一日でも早くひながたを辿ってもらいたいという思いがあったからこそ、二十五年先の定命を縮めて御身を隠されたというのが、明治二十年のをやの思いではなかったでしょうか。

▼ひながたを辿る手立て

教祖は、つとめとさづけを急き込まれて、御身を隠されたと聞いておりますが、それでは、何のためのつとめとさづけなのかと改めて考えてみましょう。

教祖は、御自ら、をびやだすけから初めて不思議なたすけを現わしてくださったというひながたがありますが、私たちは月日のやしろではないので、当然、不思議なたすけを現わすことはできません。

ひながたを辿るためには、一人ひとりが、不思議なたすけを現わしていく必要もあるわけで、ひながたを辿るための手立てとして、つとめとさづけというものがあったのではないでしょうか。

教祖は五十年のひながたを歩まれましたが、それは、私たち一人ひとりが、これさえ通れば陽気ぐらしに立て替わるという道として、御自らお通りくだされたわけです。

つとめとさづけは、ひながたを通るための一つの手立てでですが、教祖のひながたは、つとめとさづけだけではなく、むしろ、それは、ほんの一部で、それだけで陽気ぐらしに向かえるものではありません。

つまり、ひながたは陽気ぐらしに向かうためのもので、つとめとさづけはひながたを辿るためにある、目的は、ひながたを辿るということです。そのことをお互いに思案しなければなりません。

どういうひながたか

▼陽気ぐらしを目指すひながた

さて、『教典』第十章に「陽気ぐらしとは楽しみづくめの生活(くらし)である。」とあります。

ひながたは、それさえ通れば、私たち一人ひとりの力でもって、世の中が陽気ぐらしに立て替わってくるという道筋ですから、楽しみ尽くめの生活をすることが陽気ぐらしなら、ひながたとは、楽しみ尽くめの暮らしを目指すための歩みであるということになります。

つまり、目指すのです。今だけを楽しみ喜こぶのではありません。楽しみ尽くめを目指すためのひながたです。

『おふでさき』に「楽しむ」というお言葉が二十首ありますが、半分程は、神の楽しみ・月日楽しみで、後の半分は、先の楽しみ・後の楽しみです。今を楽しむとは、ほんのわずかで、むしろ、この道の先を楽しめです。

今は楽しめない喜べない日もあるだろう。しかし、このひながたさえ通ったならば、見るもの・聞くものすべて楽しみという、楽しみ尽くめの暮らしに立て替わってくる、それがひながたです。

私たちは、今、喜べれば、今、楽しめればいいと、つい思いがちです。お道を通っていても、そういう部分は捨て切れません。

信仰しているから、「陽気ぐらしの天理教」だから、今、楽しめばいい、今、陽気に暮らせばいいと、つい思いがちです。確かに、そういう部分もあるでしょう。

しかし、本来、求めるべきは、今の楽しみよりも先の楽しみです。先に現われる楽しみ尽くめの暮らしこそが、私たちの目的であり、それをお示しいただたのがひながたです。

▼「陽気な暮らし」と陽気ぐらし

ひながたは、それさえ通れば陽気ぐらし＝楽しみ尽くめの暮らしに向かうという唯一のありがたい道筋です。

ところが、ひながたはと見たときに、なるほど陽気暮らしだなと思えるでしょうか。

天保九年、月日のやしろとなられるまでは、大庄屋の中山家の若奥様です。大きなお屋敷、大勢の使用人、たくさんの田地田畑……、それこそ遊んで暮らせるようなお立場でした。起きても布団を上げる必要もない、ご飯も作る必要もない、掃除・洗濯する必要がない、寝るときも布団もちゃんと敷いてくれる、それぐらいのことをしてもらっても構わないようなお立場の方でした。お生まれは、前川家。これも素晴らしいお家です。素晴らしいお家から、より素晴らしいお家にお嫁に

行かれて、それこそ陽気暮らしそのものの暮らしです。

中山みき様は、私たちが陽気暮らしの理想としているような姿は、多少の身上・事情はあったようですが、初めからもっておられたのです。私たちが求めるような陽気暮らしができる立場の方ですから、もうすでに陽気暮らししておられたのではないでしょうか。

ところが、天保九年、月日のやしろとなられてからのひながたは、真反対で、貧のどん底に落ち切られる、ご自分は流産される、夫・善兵衛様には先立たれる、子供たちにも先立たれる……、いいことがありますか。

その日食べるのを苦しむよなところから、教祖にたすけられた人々が、「ありがたい。教祖、どうぞ食べてください。」と教祖のもとに寄ってきた。多少なりとも世間が認めるようになってくると、警察に拘引され、留置される。

大庄屋の中山家は、それまで、世間から、素晴らしい家・素晴らしい人と認められていたのが、月日のやしろとなられた途端に、五十年間、世間から罵詈雑言を吐かれ、忌み嫌われたまま御身を隠された。『おふでさき』に「足のちんばが一の残念」とある、このお道を始めるきっかけになった、長男・秀司様の足の悩みも、一生涯治らなかったとも聞いています。

これがひながたです。

どうですか、皆さん、見えた世界は、陽気暮らしの世界ですか。どこが素晴らしいのですか。いいところが一つもないと思いませんか。

▼結構になることが陽気ぐらしではない

私たちは、身上や事情が治まって結構になることが、心が豊かになって陽気ぐらしになることだと、つい思いがちですが、果たしてそうでしょうか。

明治二十年当時、医者もあまりいなかった。その当時たすからなかった病気も、今日、医学の発展もあって、たすかるようになった。その当時、貧しい人がいっぱいいた、差別で苦しんでいる人もいっぱいいた。その当時からすれば貧困も差別も少なくなって、不景気ながらも、食うに困るでなし、日常生活は何とかやっていけるだけのものはお与えいただいているではないですか。どれだけ結構になっていますか。

たすからなかった身上もたすかるようになり、生活も豊かになっているのだから、当然、それだけ心が豊かになって、陽気ぐらしになるはずです。

ところが、現実はどうですか。今朝のニュースでも、十人に八人以上が、不安を抱えて生きていると言っていました。生活が豊かになっているのに、なぜ、心が豊かになって陽気ぐらしに近づかないのですか。むしろ、心の方は、逆にどんどん荒んできている。今、世の中に現われてる姿を見てもそうでしょう。

▼心一つの理で、陽気ぐらしへ

見えている世界だけは、決して陽気ぐらしの世界ではないということ、ひながたは、それを見せていただいているのです。

教祖が月日のやしろになられ、貧のどん底に落ちきられている中に、家族の方々にも、理解がなかなか得られなかった。夫・善兵衛様が、刀を持って「憑き物ならば去れ」と言って教祖に迫られたという史実も残っています。その中に教祖は、私さえいなければ、みんなにも迷惑をかけることもないと宮池に身を投げようともされた。――これは、教祖がその通りに思われたというよりも、むしろ私たちに対する一つのひながただと思います。このお道を通るということは、決して楽々な道ではない。中には家族からも反対され、私さえいなければ、私さえ信仰しなければというような思いをする日もあるだろうという一つのひながたではないだろうかと思います。

「私さえいなければ……」という心が、日が経つ内に「わしらは結構や、水を飲めば水の味がする。」という喜びの心に切り替わってきています。

晩年になっても、大勢の人たちが寄ってくるよ

うになり、おつとめをつとめることによって警察に拘引され、留置されるようになった。普通なら辞めた方がよいと思うでしょうが、教祖は、「ふしから芽が出る」といそいそと出かけられた。正しく、楽しみ尽くめです。どんな辛い中でも、「可愛い子供がすることや」と、拘引され留置されたのです。

信じがたいでしょうが、これがひながたではないでしょうか。

陽気ぐらしに向かうためには、見えた世界が良くなることではなく、一人ひとりの心が陽気尽くめの心になることが一番大切な角目です。見えた世界にばかり御守護を求めますが、それは違います。見えた世界がどうあれ、心一つの理が陽気ぐらしに向かうための道筋として、ひながたをお示しいただいているのではないでしょうか。

心一つの理で、陽気ぐらしに向かうということが大切です。

見えた世界では、教祖のお姿は、良くなるどころか、むしろ悪くなっています。しかし、それに相反して、心の理は正しく陽気尽くめの心に変わってきているというところに、ひながたのひながたたる所以があるということを改めて思案したい。

ひながた＝何もかもが結構だと思うのが違うのです。心一つの理で陽気ぐらしに向かうということがひながたであるということです。

年祭活動の意義

▼苦労を求めて

さて、そのひながたの道筋は、今、申しましたように楽々の道は一つもありません。御自らもそうですし、周りの人々に対しても並々ならぬ道・厳しい道を与え通らせておられるような気がして仕方ありません。

普段は大変お優しい教祖ですが、いざ子供の成人に対する仕込みとなると、むしろ厳しいのです。末女・こかん様を浪速に神名流しに出されたのは、夫・善兵衛様お出直し直後のまだ心が悲しいときです。おはる様の初産のときも、壁が落ちるような大きな地震の中で楽々と安産しました。これは、不思議な自由な御守護も楽々の中には見せていないのです。また、最初のつとめ場所の普請のときも、棟上げができ、皆が勇み切っている中での大和事件。たすけのもとだてと教えていただいたおつとめも、意気揚々とつとめていたら、拘引され、留置される。一番大事なおつとめさえも、楽々では、させてないではないですか。

確かに、一方では、分らない子供がそういうふうに仕掛けているだけの話であって、神様がそうされたのではないと考える向きもあるでしょうが、私は、むしろ、成ってくるのが天の理と考えれば、そういうことさえも、神様がなさったのではないかと思います。成人させるために、苦労をさせておられるのです。ここにひながたがあるのではないでしょうか。

陽気ぐらし(楽しみ尽くめ)に向かうためには、一人ひとりがひながたを見つめ、苦労の中に身を置いて、たすけ一条の道を歩むということが大切なのではないでしょうか。

▼人だすけを心定めて

目の前の楽しみは短い。先の楽しみは細い道のようでも長い。真実の楽しみをよく思案すれば、楽しみという理は何からできたものか。容易ならん道、欲を離れて出てくる。と教えられます。

また、身上・事情あって道と言う。身上あって楽しみ、楽しみあって道と言う。とも仰せられます。身上・事情さえも楽しみに向かう道筋です。

身上・事情が悪いのではなく、その中にこそ、たすけ一条の心をもって、その歩みを進めるから、楽しみ尽くめという心に切り替わらせてもらえるということではないでしょうか。

教祖年祭の旬には大きな身上・事情を見せていただきますが、それが悪いのではなく、その中にこそ、人だすけの道を心定めして歩んでくれという神様のお急き込みなのです。

何が悪いこれが悪いと反省することよりも、人

だすけさえ心定めして通ったならば、神様に十分お受け取りいただく道筋があります。

この旬に、身上・事情を見せていただく程、ありがたいのです。見せていただけないのなら、むしろ、自ら苦労を求めて、歩んでこそひながたを辿るということになるのではないでしょうか。

実践項目を掲げておりますが、できるからする、できなかったらしなくてもよいというのではなく、少しでもさせてもらうための苦労――にをいがけ・おさづけ・おつとめ・ひのきしんをさせてもらうための苦労――を一つひとつ、自ら求めて歩むところに、年祭の意義があると思います。

▼ひながたを求めて

教祖のひながたは五十年ですが、その中のたった三つ、三年千日、ひながたを通ればよいとの親心をお示しいただたのが、年祭活動です。

教祖年祭は、私たち人間の都合で決めたものではなく、十年ごとを仕切っての年祭に向かって、三年千日、しっかりとひながたを通るような年祭活動にするようにと付けてくださったものです。

ですから、三年千日、仕切って、教祖の年祭を目指してひながたを通り切るというところに、年祭を迎える意義があるのです。

百二十年祭に向かっては、もうすでに一年が過ぎてしまいました。

改めて昨年一年を振り返ってみたとき、ひながたというものを見つめ、それを辿らしてもらえたかどうか、お互いが思案させてもらいたい。残された二年はしっかりとひながたを見つめて、ひながたの万分の一でもよし、今こそひながたを辿らせてもらんだという思いで、通ることが大切です。

残された、後二年、一人ひとり、苦労を求めて、御恩報じの道を歩ませていただきしょう。

〈以上要約〉

実践項目集計（12月）

立教166年

百万軒にをいがけ	62,856軒
おさづけのお取次	4,709回
身上事情お願い	779件
提出教会	117ヶ所

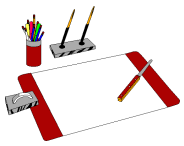
・原・稿・募・集・

内　容　①小随筆、②教会・布教所の独自の活動の紹介、③俳句・和歌・川柳、④教会行事開催後の報告記事等々

字　数　１０００字前後（８００字～１２００字）

題名・所属教会名・氏名を明記して下さい。俳句等は１句からでも結構です。

寄稿先　下記、大教会内『かさおか』編集掛宛ドシドシご寄稿下さい。



郵便：〒**714-0066**岡山県笠岡市用之江３７７

ＦＡＸ：０８６５－６６－１３１４

尚、原稿はお返し致しませんので、予めご了承下さい。

婦人会
委員・委員部長講習会

昨年九月、婦人会本部より、それぞれの委員部長に一通のお手紙をいただきました。

四月の婦人会総会でお聞かせ頂いた真柱様、会長様のお言葉をうけて、「その後どのように動いているか」、「年祭活動の底力となっているだろうか」と、委員部長の日々の歩みを反省させていただくものでした。

このころから、一月三十一日。委員と全委員部長の講習会を開催させて頂きました。

まず、支部長様から「会長様の思い、立場の自覚、婦人の徳性を活かしたにをいがけ、おたすけ」についてお話を聞かせていただき、この旬にふさわしい通り方をお促し下さいました。

午後より六、七人のグループに分かれて練り合いをさせて頂きました。

「今、委員部長としてどう歩めばいいのか」ということを中心に、それぞれが年祭活動の底力となる成人と実動を求めてねりあいを重ねました。

その後、各班の代表が練りあったことを発表し、活動方針を日々の暮らしの中に素直に実行することを誓い合い、勇んだ雰囲気の中、閉会といたしました。

参加者数、百十七名。

（婦人会常任委員　武内正美）

第二次
直属ひのきしん五日隊

直属ひのきしん五日隊第二次を一月二十七日より三十一日迄、中村剛久松分教会長を隊長に二十八名（内、女子二名）で伏せ込ませて頂きました。一月二十七日の入隊式で本部責任者の方より「工事はおよそ半分終える事が出来ました。予想を超える大勢の方の真心と伏せ込みのお陰です。五日間勇み心でひのきしんに伏せ込ませて頂きましょう」と、挨拶が有り、参加者の中には足の不自由な人、腰の痛む人、高齢の人等様々な人の集まりでしたが一同楽しく真剣に精一杯伏せ込ませて頂きました。

夜には修練として一日目は各班での自己紹介、二日目も班毎で今の旬について練り合い、三日目は上下分教会長山野弘実氏、福成布教所長藤井正仁氏による感話、世話班中村剛氏の教話を聞かせて頂きました。四日目は大教会の親心による会食で鍋を囲み、お酒も入って楽しい一時を過ごしました。五日目は午前中の作業終了後、神殿でお礼づとめをさせて頂き、昼食後解散しました。

私自身一日目を終えた時、世話班という重責をお与え頂きながら右足のすねが腫れ上がり、痛くて曲げる事も出来ず、歩くのも右足をひこずるような姿をお見せ頂き、二日目の朝、今日は休ませて頂こうと横着心が出てきた時、中村先生が「足のちんばが一のざんねん」と、一言、はっと私は何をしに来ているのかと気付かせて頂き、痛む足をお見せ下さり私をおためしになっている。少しの土でも運ばせて頂こうと考え直し現場へ、土が運ばれなければモッコの修理をさせて頂けるとの事で、残りの四日間モッコ修理に伏せ込ませて頂き、五日目には少し痛みは残りましたが、元通りの足にもどり、親元での伏せ込みに対する心構えをお教え頂く事が出来ましたのは心うれしく勇み心を持たせて下さいました。

昨年の十一月三十日の大教会挙げての伏せ込み団参で、大教会長様より「陽気ぐらしの家を建てよう、陽気ぐらしという家はにをいがけとおたすけで建てるのです。その為の理作りがおぢばでの伏せ込みで有ります」と、御挨拶頂きました。この事を改めて肝に銘じ、毎日をつとめさせて頂く事を心の定めて帰らせて頂きました。おぢばへの伏せ込みはたすけの理づくりとお教え頂く事をしっかりと実践させて頂く事が出来、五日間晴天の御守護を戴き、事故もなく皆さん元気につとめ終えられ、明るく勇んで帰られました事は、非常に有意義な五日隊であったと思わせて頂きました。

（布教部員　岡崎和夫）

直属ひのきしん 五日隊に参加して

亀田山分教会　高橋信男

今回の五日隊土持ひのきしんに参加するようにと、教会の会長より話があったのは、五日隊初日の四、五日前で、急な事では有りましたが、こころよく受けさせて頂きました。

昨年の十一月三十日に行われた、笠岡大教会土持ひのきしん団参の時は、残念ながら、島根教区災害救援ひのきしん隊の九州ブロック訓練の日程と重なり、参加出来なかったので、何とか次の機会には、是非ともと思っていましたので、喜びいっぱいで参加しました。

私は二十六日の京都行き夜行バスで、おぢばへと向かいました。山陰地方は二十五日より雪が降り、道中心配をしましたが、定刻に京都に着き、近鉄電車に乗り換えておぢばに帰らせていただきました。詰所で朝の食事を頂き、休む間もなく詰所のマイクロバスにて、土持ひのきしんの行われている現場まで送ってもらいました。今回は、笠岡を含めて十ヶ所位の直属教会の人達が、老若男女を問わず、大勢参加されており、土持の現場もにぎやかになっていました。九時に朝礼をしてから、土持ひのきしんを開始しましたが、その日は土を持った所が水を含んでおり、靴の底にベットリと泥が付着して、まことに歩きにくい状態でした。特に坂の上り下りでは、すべらない様にと、慎重に歩かざるを得ない状況で、これではひのきしんがやりづらいなと思っていた所、本部の係の人が、むしろを引いて下さったので、やっと安心して歩く事が出来るようになり、ひのきしんも捗る様になりました。その後は天気にも恵まれて順調にひのきしんが進んでいきました。午前中二時間、午後二時間と、ひのきしんの時間が決めてあり、最初は短い様な気がしていましたが、いざ始めて見ると、あの距離をモッコを担いで往復すると、足に負担がかかり、普段余り歩く事のない私のような人間にはきついものがあり、休憩を十分に取りながら、自分にあったペースで、土持ひのきしんを行った方が良かったと思いました。お年寄りのご婦人が、手押し車を押しながら黙々と土を運んでいる姿を見た時に、親神様より結構な身体をかりものとして貸して頂いて、その体で親神様の喜んで下さる、欲を忘れて人のため、世のためにひたすら尽くすひのきしん精神の原点を見た思いがしました。

最後に、今回の五日隊ひのきしんは、色々と勉強になる事も多く、有意義な五日間を過ごす事が出来ました。

心の修養

雲東分教会　米原豊

母親の信仰の始まりから、私くしも用木になって、かなりの年月が過ぎています。会社の退職後、やっと教会の月次祭に足を運ぶ様になりましたが、まだまだ未信者同様でございます。

この度、会長様の勧めにより修養科生として、お道の修養に入らせて頂きました。今のところ幸いにも身上、事情もなく有り難く思っています。これからも無難に通らせて頂きたく、心づくりの願いもございました。

今期の笠岡詰所には、七名の修養科生の集いです。年齢、性格も違う中、親神様のお引寄せにより、これから三ヶ月間の生活が始まりました。お互いに助け合い、協力しながら日々を楽しく過ごす事を誓い、私くしも心がけてまいりました。

これまでの生活とは違い、早朝からそれぞれの受持の清掃、食事の準備など、手際良く行い、学校での授業、そして定期、長期のひのきしん、年

末年始、大晦日のひのきしんや、土持ちひのきしんなど、又詰所では信者様が気持ち良くお帰り頂く為に、色々な面に対して気配りをしなければならない事、これもひのきしんを通して教祖のひながたをたどり、常に感謝の気持を忘れず勇んで通らせて頂くことが、喜びにつながり心がすっきりすることにより嬉しさが増してくれます。ひのきしんをすることによって癖、性分などを見つめ直す事も出来、言われなくても進んで行い又、陰徳を積む様にと聞かされ、これまでの自分を改めて、見つめ直して反省することも多く、親神様にお詫びしながら心を戒めています。

修養科生活も三ヶ月目に入り、修練場では一段とをてふり、鳴物に熱が入ってまいりましたが、なかなか思う様に成らず焦りが募りますが、投げ出さず勇んで修練に臨んでいます。このところ寒さも厳しく、その影響か体調をくずす方も出始め、お互いに体に注意しましょうと声がけし、教理の上から親神様のかしもの、かりものの理、又八つのほこりの心違いを思い浮かべ、体を大切に扱い、そして勇み心でお連れ通らせて頂ければと思って居ります。

修養科で学んだ事を更に深め、お道の上から思案をしながら一歩一歩成人に向けて歩み、まず教会へ足を運ばせて頂き、来る教祖百二十年祭に向かって、勇み心で通らせて頂きます。

修養科に入って

明石市分教会　杉原智子

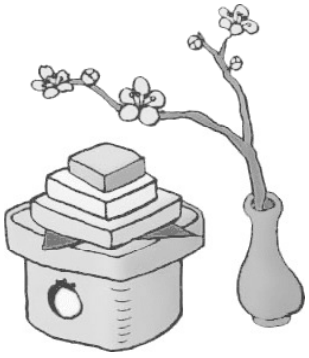
「教会の娘」という風に呼ばれるのが本当にいやでした。小さい頃は何も考えずにいましたが、大きくなるにつれ、家が天理教の教会である事も嫌い、おつとめにも何かと理由をつけては出ないようになっていきました。中学、高校の頃には両親にも反発し、何を言われても「はい。」と返事はしても全く聞いておらず、また返事すらしない事もままありました。何故自分の家は教会なのか、何故教会に生まれたからといって天理教を信仰しなければならないのか、そんな疑問を抱き続けたまま、両親にぶつける事もなく、ただ何もかも否定してきました。そんな私も大学を卒業し社会に出て、ようやく少しですが、両親とも話をできるようになって、申し訳ない気持でいっぱいになりました。

何でもいいから、少しは私も両親の役に立ちたい、喜んでもらえるようなことをしたいと思えるようになった頃、仕事を退職し、両親から修養科へ行ってみないか、という勧めがありました。天理教のことを何も知らないまま否定し続けていた私にとって、両親への気持ち、感謝を表す一つの機会だと思っておぢばへ帰ってきました。

修養科は、私が思っていたよりずっと楽しく過ごすことができました。最初は、教会の娘なのにそんな事も知らないのか、というようなことがあって、ひどく落ち込むこともありました。けれど私が教会の娘であることは事実で、あとは自分がどのように行動するかにかかっていると思って、ひのきしんに勇むようになりました。

特に長期ひのきしんで当たった神殿のひがしお守り所は、修養科生のやるひのきしんの中でもかんろだいに最も近いところでさせていただいています。決まった時間で各々担当場所を掃除しつつ、それぞれのつながりでひのきしんが進んでいきます。普段入れないお守り所のひのきしんというだけでなく、各担当のつながりの和が大切なひのきしんで、やりがいがあり充実していました。

修養科も残り一ヶ月を切りましたが、最後まで悔いの残らないよう勇んで参りたいと思います。



談話室

元旦の一日

出雲分教会　鳥谷　秀夫

立教百六十七年の元旦、四時四十五分さわやかに目覚める穏やかな好天気の御守護を頂いて、本年の第一日が始まる。洗面を済ませると、すっきりと心も引き締まる。直ぐ教服に着替えて、我が家の神床に拝し、開扉献饌、親神様、御霊様に各十五台正月らしい神床になる。おつとめを勤めてより教会の元旦祭に参拝する。徒歩で十分、今年は孫達も一緒に歩く。教会に着くと、子供達のにぎやかな声が聞こえる。直ぐにつとめ着に着替えて祭典準備にかかる。人数も次第に多くなり、五時三十分、奉仕者も揃う。二番太鼓と共に開扉が行われ、献饌へと進み、六時より祭典が始まる。祭主、会長様の祭文奏上は昨年中に頂いた御守護へのお礼と反省、そして、教祖百二十年祭へ三年千日の二年目を迎えての心構えを述べられる。続いて、坐りつとめ、てをどりつとめと和やかに勇んで終え、会長様より新年の御挨拶を頂くと、新年を迎えさせていただいた喜びが実感をして心に広がる。個々に新年の喜びを挨拶した。八時三十分頃より食堂にて直会を頂く。お酒を招れながら、皆が和やかに、又、にぎやかに語らい笑う。想えば、私も新年の行事にも五十年間位ほとんど欠かさずに勤めさせて頂いて来た様に思う。天候は年々に、雨の日、吹雪の日、又、晴れた日と変わるが月次祭とは異なった感じのある元旦祭は、意味深いものがあると思う。年祭活動も半ばを迎える本年、一歩前進を心して歩ませて頂かねばならないと誓いを新たにする所である。私も七十五才、次の年祭には八十に近い年令になる事を考えると、尚更の事である。十時三十分頃より帰途に着く。家に帰ると張り切った満足感と、少しの寝不足の疲れも出て、届いた年賀状を読みながら心良い昼寝の眠りに入り、今年の元旦を終える。

教養掛助員一年生

瑞雲分教会長　西村　彦一

立教一六七年午前五時十分、本部元旦祭が始まった。厳寒の神殿でピーンとした緊張の一瞬。ふと此処に居る自分がなんとも快感である。修養科七五二期の教養助員としてお引寄せ頂いた賜り物であるのだと。思い返せば御命を頂いた頃は、正月は自教会の大祭後に出れば良いだろう？と決めていたが、十二月大教会祭典終了後に大教会長様が「掛は一日も休まず勤めるようお願いします」と私の顔を見て仰いました。「はい」と返事してしまった。それは四名の掛員が揃い「おてふり」の御手直し後の事でした。戻って皆に話したら「大丈夫！頑張ってお地場に勤めて下さい」と、後継者は「兄弟で力合わせて何とか勤めるから、心置きなく・・」行くなと懇願されるものと思いきや逆に押し出された嫌いあり、心が定まった。さて詰所では出雲そばで年越しを祝い、吉岡奥様の心こもる「お雑煮」「特製おせち」の持て成しは、経済的かつ効果的な、新年のお祝いとなるご馳走でありました。

では肝心の教養掛の方は・・修養科生にとっては至らぬ届かぬ点は多々在ったと思うが、必ずや此れからの人生の糧となり、貴重な基盤となる三

春季大祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に会長上原理一慎んで申し上げます

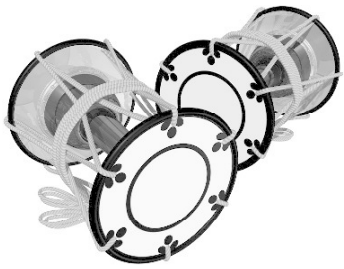
親神様には「いちれつのこどもがかハいそれゆへにいろ〳〵心つくしきるなり」と人間の陽気ぐらしを楽しみにこの世と人間をお創造になったばかりでなく天然自然の理でお育て下さると共にお約束のままに天保九年この世の表にお現れになり教祖を月日の社とお定めになり陽気ぐらしに向かうひながたをお示し下さいましたその親心の程は誠に有難く勿体ない極みでございます　お引き寄せ頂いた私共は真実の親心に触れ我が心の反省を重ねつつ生かされている喜びと御恩報じを胸に日々はたすけ一条の御用の上に勤め励まして頂いております　その中にもこの月二十六日はひながたの親たる教祖が一れつ子供の成人を急き込まれ御身をお隠しになされてろくぢに踏みならしに出られた尊い日でございますのでおぢばでは春季大祭が執り行われますがこれの大教会でも理のお許しを戴いて只今からおつとめ奉仕者一同喜びと感謝の心一杯に勇んで坐りづとめてをどりをつとめて春の大祭を執り行わせて頂きます　御前には遠近を問わず又冬の寒さも厭わず寄り集いました理に繋がる道の子供達が同じ思いに伏し拝み改めて御礼申し上げる真実の状を御覧下さいまして親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

さて年も改まり教祖百二十年祭に向け三年千日と仕切っての成人の歩みも二年目を迎え皆夫々に年頭より心を定め実践項目の実動に邁進すべくたすけ一条の上に勤めさせて頂いておりますが昨年一年を振り返って見た時教祖年祭に向けての三年千日の歩みはひながたを辿るべき歩みのはずが辿りきれていない感があります　教祖百二十年祭に向けて残されたあと二年ひながたをしっかりと胸に湛えて自ら苦労を求めてたすけ一条の上に勤め励ませて頂く覚悟でございます

何卒親神様には我さえよくばの混迷の時代にあって私利私欲を捨て世界一列救けたいとの親心に精一杯応えようとする皆の真実誠の心をお受け取り下さいまして万たすけの上に尚も自由の御守護を賜りたすけ一条の喜びを共々に味わせて頂いて今より多くの人で喜びを分かちあえる百二十年祭を迎えさせて頂けますようお導きの程を一同と共に慎んでお願い申し上げます

ヵ月に成るであろう。私の其れがそうで在ったように。私の子供達と同じ年恰好の皆は、少人数ながら互い認め合い「因縁寄せて守護する」自己のしっかりした考えを持っている。過去の無軌道なことの修正、成ってくる姿を受け入れている様に見える。反面、情報化時代の携帯電話で知り得る事、自分を出す前に相手を伺いけん制する。建前と言う垣根を越えない本音、自分の方針は損してでも誇示する。そう見えたのも一月末には少し変わってきた。あと少しだ皆で頑張ってほしい。

正月四日の恒例鏡開きには初体験の緊張で勤めた。西礼拝場の北側の場所で、包丁で餅を切っていましたら、「御免なさい、ここ良いですか？」と真柱様の奥様がお出ましに成られ、私の横で始められました。それからの時間は高貴で暖かく、得も言えぬ心地に感じました。こんなにも素晴らしい正月が、お地場に在るなんて、勤めたものにしか解からないご守護でありましょう。有難う御座いました。ここで改めて訓示下さった大教会長様、教養主任、私の教養主任だった吉岡詰所部長、詰所諸先生方々に「ありがとうございました」更に五日隊も中身があったよ。



こころの詩

▼養徳社発行『陽気』誌二月号、「道柳」より転載

▽今回の課題は「生」、撰六十一句中、笠岡に繋がる教友の方二名、二句が見事撰ばれ掲載されていましたので転載させて頂きます。おめでとうございます。

準秀詠　芳阪布教所長　杉原幹夫

伏せ込みの長き道経て理が芽生え

川島郷分教会前会長　香取敏子

生と死の狭間で悟るをやの恩

▼呉市・東濱十三雄さん(福順分教会長)よりの寄稿です。

「病喜録」

ふり向けば　ささえてくれた人ばかり
痛む身体を　春風包む

改革は心のほこりはらう道
なれど進まぬ　改革の道

点滴の音を目で聞き木枯しを
耳で聞きつつ　今日も生かされ

春の学生おぢばがえり

日　時	3月28日（日）
内　容	式典「真柱様お言葉」（午前9時・本部中庭） 直属アワー・別席 後夜祭『春まつり』（夕づとめ後）

鼓笛バンド講習会

日　時　３月３０日（火）～４月２日（金）３泊４日
内　容　お供え演奏曲の練習・修得、
お楽しみ行事（室内オリンピック等）
参加御供　２，０００円
※４月２日は、少年会おつとめ総会へも参加します。

立教１６７年

少年会 笠岡団 おつとめまなび総会

日　時　平成１６年４月２日（金）午前９時 受付、９時半 開会
場　所　笠岡大教会
内　容　午前中　おつとめまなび式典
午後　　アトラクション（お楽しみ行事）
対　象　少年会員、高校生、大学生（係員としてひのきしん）
参加御供　各教会　１、０００円
おつとめまなび総会役割
よろづよ～2下り目＝上　下　　３～４下り目＝直１、大教会
５～６下り目＝福　山　　７～８下り目＝高　屋
９～10下り目＝島　根　　１１下り目＝久　松
１２下り目＝直２、府中市

特別ひのきしん５日隊

期　間　４月１日（木）～４月５日（月）
割　当　２０名(参加ご希望の方は、早めに各ブロック布教部員へ)
参加御供　３，０００円

第86回　天理教婦人会総会

期　日　４月１９日(月)
式　典　午前９時３０分
本部中庭、南･東･西 礼拝場前
記念行事　講演会（５会場）

大教会だより

◎教会長資格検定講習会修了者

前期　立教167年2月14日終講

三郡　貞清律子
芦常　原　淑恵
西村　藤本晴司
東福山　枝廣隆文
芦品　藤井　潔
芦加茂　小川宣由
恵陽　藤本道善
稲倉　高島卓久
稲瀬　三宅善久
稲富士　須毛田　昇
門司港　猪原啓介
瑞雲　西村彦一
亀田山　高橋信男
吉舎　時宗一実
木津和　丸山　勤
甲井　山田かよ子
神驛　渡辺孝信

◎直属ひのきしん五日隊

自　立教166年11月1日
至　立教166年11月5日

＊世話班

久松　中村　剛
弥高山　岡﨑和夫
福廣　佐々木滋郎

＊参加者

福山　藤井正仁
海松ヶ岡　宮崎智司
吸江　山地孝志
新山邑　国定春一
明石市　花島智恵子
上下　山野弘実
美之郷　桑田正則
福勇　鳥井利昭
福芦　竹本和道
福芦　山本勝佑

訃報

畑敏男氏

福冨士分教会長

立教百六十六年十二月二十八日出直されました。

享年　九十一才

名言&迷言

おぢばの教祖殿の脇にお守り所があるが、東回廊をお守り所前まで来ると窓はなくなり、そこからは手摺になっている。窓と手摺りの角は鋼板瓦だが、手のとどく一番前の鋼板は人の手によってよく光っている。以前はもっとテカテカと光っていた。

何故？答えは簡単である。その鋼板瓦を撫でて自分の病む所を摩れば、おかげがあるというわけだ。エッ？本当かと思うだろうが、信じる者にとっては本当だから始末が悪い。お道にもこうした迷信が他にもあるが、歴史の経過と共にいろんな事が出てくるもんだ。

大和路の古寺を巡るとよく線香が焚かれており、濛々と煙が立ち昇っている。その煙を体のあちこちつけて撫で摩っている姿をよく目にする。が、この行為は説明がつく。しかし、瓦は科学的にも説明がつかない。

昨年のある時、信者さんのおさづけの理拝戴を待つ間、お守り所の前の手摺りに持たれてボンヤリしていた。そこへ七十代のお爺さんがやって来て、手摺りから身をのりだしてキョロキョロしている。

「どうしたんですか」、「いや、このあたりに瓦を摩るとおかげがあると聞いたんですがどれですかな」、「この瓦でしょう」、「おかげがあるんでしょうな」、「あのなァ、お爺さん。ここは教祖が居られるんですよ。教祖にお願いせんで、何で瓦にお願いするんですか」、「そりゃそうですな」。納得したようなせんような顔をして立ち去った。

お屋敷もいろんな伝説、迷信が生まれるもんだと、溜息が出た。